

P2-027 浸透性交雑がタニウツギ属の花部形態にあたえる影響

○高橋 睦美¹, 佐藤 崇之¹, 横山 潤² (¹山形大・院・理工, ²山形大・理・生物)

被子植物の種間交雑はさまざまなグループに広く見られる現象である。種間交雑によって生じた個体群の中には、両親種と戻し交雑を繰り返した結果、複雑な浸透性交雑集団を形成することもある。このような状況では、ある親種にもう一方の親種の遺伝的特性が浸透することにより、新たな進化が生じる可能性があり、被子植物の多様化の研究においては無視できない現象である。東北地方に分布するタニウツギ属 *Weigela* 5種のうち、タニウツギ *W. hortensis* とキバナウツギ *W. maximowiczii* は異なる節に属するが、交雑個体を形成することが知られており、その形態的特徴から、浸透性交雑の可能性も示唆されている。本研究では、種間交雑によってそれぞれの種への遺伝的浸透が生じているのか否かについて、遺伝的解析と花部の形態形質の計測を行って評価した。タニウツギとキバナウツギが混生している宮城県仙台市および山形県山形市の2集団について、AFLP解析によって個体の遺伝的特性を調査した。その結果、いずれの種へも浸透が起きていることが示されたが、その割合はキバナウツギの方が低かった。花冠および萼筒の12の形質を測定して比較したところ、タニウツギに比べキバナウツギでは個体間の形態的差異は小さく、形態的特徴から浸透性交雑が想定される個体はほとんどなかった。タニウツギへのキバナウツギの遺伝的浸透に比べ、キバナウツギへの浸透は相対的に小さいと考えられる。